



自著紹介

『ユニバーサルトイレ：
多様な利用者のための環境デザイン手法』

(彰国社、2017年3月)

田中直人

(島根大学大学院総合理工学研究科特任教授)

ユニバーサルデザインは、年齢や身体能力に関わらず、できるだけ多くの人が美しいと感じ、かつ容易に使えるよう製品や建築物をデザインするという考え方である。筆者らはこれまで行ってきた調査研究から得られた知見をもとに、国連10年記念施設：国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）やSCイオンレイクタウンなどにおける設計・監修などでユニバーサルデザインを実践しながら検証し、新たな提案を試みるプロセスを繰り返してきた。これらのユニバーサルデザインに関する一連の取組みを「建築・都市のユニバーサルデザイン—その考え方と実践手法」（彰国社、2012）として本書に先立ち発刊したが、ユニバーサルデザインへの実践手法を提示するものとして、2014年に日本建築学会著作賞をいただいている。

本書はユニバーサルデザインとし

て展開する公共トイレを「ユニバーサルトイレ」と称し、これまでの筆者らの一連の調査研究結果や公共的な施設で計画・デザインを試みた公共トイレの検証結果などからの知見にもとづいて、多様な人の利用を想定したデザインモデルを環境デザイン手法として提示するものである。

第1章では日本の公共トイレの現状と課題について、第2章では多様な利用者の属性に注目し、公共トイレの利用実態調査の結果などから配慮すべき課題を整理するとともに、その配慮方法を示している。第3章ではユニバーサルデザインとしての公共トイレのあり方を属性別の整備課題をふまえて、具体的な公共トイレの計画・デザインモデルを示しながら、その解決に向けた手法を提案している。専門の研究者や建築関係者に限らず、学生や一般市民にも多くの事例や親しみやすく美しい図や

スケッチなど用いて理解しやすいよう工夫している。

かつて、公共トイレには4K（怖い、汚い、暗い、臭い）と表現されていたマイナスイメージがあった。しかし近年、まちづくりとして、公共トイレに関心をもつ市民や行政、あるいはトイレに関係する専門事業者、デザイナーなどの取組みもあり、これまでのイメージを一新するような事例も登場している。加えて公共施設に限らず、商業施設などにおいても、美しく、快適なトイレはお客様サービスの向上に寄与するものとして整備されている。つまり4Kの解消に加え、福祉のまちづくりとして、従来のトイレ空間に欠落していたバリアフリーデザインが導入されはじめている。多様な利用者にとって、安全快適なユニバーサルトイレの実現が期待される（図）。

しかし、現状としてはこれまでの調査研究からも明らかなように、公

共トイレに関する課題は多い。例えば、ユニバーサルデザインとして整備された「多機能トイレ」は、機能が充実したため、ここでしか用が足せない車いす利用の人や介助が必要な人以外の人たちの利用も増え、常に“使用中”となり数不足が問題となっている。さらには異性介助やLGBT等の性に関する配慮など、新たな視点や条件からトイレのあり方を検討する必要が出てきている。

トイレについては、便器などのもののレベルからトイレ環境ともいえるべきトータルな生活環境の一部として捉え、計画、デザインされるべきと考える。新しい材料や技術を踏まえたデザインの可能性は大きく、これからの進化するトイレ環境の創造が期待される。今後も多くの関係者の皆様と協働して、公共トイレのユニバーサルデザインへのスパイラルアップを図る礎として、本書がお役に立つことを願っている。

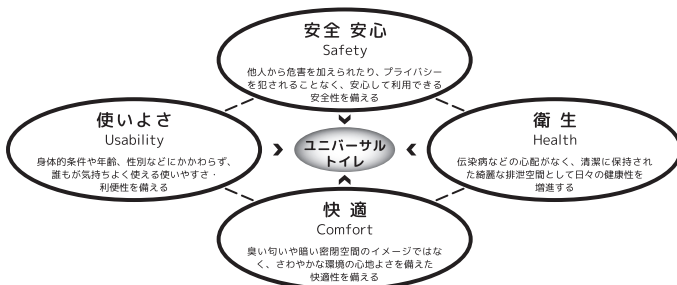


図 トイレの4Kに代わる新たなキーワード